

## アメリカの超越主義思想

マックス・ミュラーの宗教学成立の周辺  
—— エマソンとの関わり他 ——

前田 禮子

Emerson's Transcendentalism in Reference to  
Max Mueller's *Introduction to Science of Religion*

Reiko MAEDA

### 要約

ドイツに発祥のローマン主義文芸運動から、コールリッジ、キーツ、ワーズワースなど直感による詩才の奔出があった。神秘家スエーデンボルグの出現もあって、ヨーロッパではルネッサンス以降神中心の基督教の凋落はとめどなく、アメリカにも遅ればせながらネオ・ルネッサンスの思潮が起り、エマソンによって人間主義の超越主義思想が憧憬された。ユニテリアニズムを以って始まるエマソンの『自然』による超越主義思想は、旧大陸の気運を凌ぐ過激なものであった。ドイツから帰化したイギリスのマックス・ミュラーは当時、学術的に宗教を解明すべく、新しい学問分野として「宗教学」を提唱した。科学的に宗教(=神秘思想)を捉えるというマックス・ミュラーの相反するものの接合の試みと、エマソンが『自然』の中で説いた超越主義思想とはきわめて近い類縁関係にある。

保守的なイギリスの伝統の中にいたマックス・ミュラーは、純粋に自己の主張を掲げるエマソンを賞賛し、著書を贈っていた。ユニテリアニズムは、三位一体説を退け、神と人との直接の融合を説いた。エマソンは、そのユニテリアニズムをも越えて、さらに、インド思想の影響から、性善説に接近した。インドの仏教古典は、サンスクリット語とインド学の権威であったマックス・ミュラーと、インド仏教に傾倒するエマソンとのさらなる接点である。

キーワード：マックス・ミュラーの宗教学、エマソンの『自然』、  
アメリカの超越主義思想、三位一体を否定するユニテリアニズム

## はじめに

いわゆる超越主義思想とは何か、どのようにして拠って来たり、その後どのような影響をアメリカ文学にもたらしたか、について述べる。超越主義思想をもたらしたエマソンの思想について、再考してみる。文学批評の方法には歴史性への関心が乏しい、といった批判もあり、その批判にこだわり、まず、アメリカの超越主義思想の源流を辿ることにした。

### 〈なぜマックス・ミュラーか〉

マックス・ミュラー (Friedrich Max Mueller 1823-1900) は、*Lectures on The Science of Religion* (1870) という講演によって、宗教を科学的・客観的に研究するための、宗教学というものを提唱している。ドイツやフランス他にも、そのような気運に興味が高まって、その *Lectures on The Science of Religion* の翻訳が相次いだ。この提唱への興味が大きいを見て、マックス・ミュラーは、1873年にこの講演論文を『宗教学序説』(*Introduction to the Science of Religion*) として出版している。この著書の序文で、マックス・ミュラーは、アメリカの動向に触れ、エマソン (R.W. Emerson, 1803-1882) に、この著書を献じている。

序文には、

「比較神学の文献は、とくにアメリカで、急速に増えつつある。クラーク (James F. Clarke)、ジョンソン (Samuel Johnson) とフロシナム (O.B. Frothingham) の著作、ヒギンソン (T.W. Higginson)、ガネット (W.C. Ganneett) とチャドウィック (J.W. Chadwick) の講演、アボット (F.E. Abbot) の哲学論文は、偏見をこうむりながらも、新世界は旧世界と足並みを揃えつづけ、古代宗教の研究は、すべて、かならず重要な実際の成果を上げるであろうと深く確信づけるものばかりである」

(“…all show that the New World, in spite of all its preoccupations, has not ceased to feel at one with the Old World; all bear witness of a deep conviction that the study of the ancient religion of mankind will not remain without momentous practical results.”) と述べられている。

また、同じ序文で、マックス・ミュラーがつぎのような抱負を述べている。エマソンの思想のどのようなところに共鳴を表しているのか、その理由について、また、マックス・ミュラーのどのようなところがエマソンと共通しているのかについて、考えてみる。

「もし大胆にして学者的、かつ敬虔な心をもって実践すれば、私 (=マックス・ミュラー) の宗教学は、かならずや、ひとえに現在の宗教の地平の狭さに起因する、多くの疑念や困難を解消させるものと確信する。今の時代のささいな論争を超えてわれわれの視野や共感を拡大さ

せるだろう。そして近い将来、キリスト教の中心部において新たな魂と生命を呼び起こすだろう。」

(‘That study, I feel convinced, if carried on in a bold, but scholar-like, careful, and reverent spirit, will remove many doubts and difficulties which are due entirely to the narrowness of our religious horizon; it will enlarge our sympathies, it will raise our thoughts above the small controversies of the day, and at no distant future evoke in the very heart of Christianity a fresh spirit, and a new life.’ M.M. -Oxford, May 12, 1873)

### 〈エマソンの超越主義思想〉

神と人間をつなぐ仲介者としてのキリストの存在を認めないとすれば、そのような宗教が存在するためには、神からのメッセージは、直接神から個々の人間へ伝達されることにならざるをえない。超越 (Transcend) という言葉の字義からは、経験を超越して直接個人が啓示を受けるといふ、ローマン主義文芸復興の高揚した気運が伝わる。文芸運動としては、靈感によって突き動かされ、作品が溢れ出た時代があったのは事実である。しかし、宗教にあっては、直接個人が神から啓示を受けうる、と説いて、ある意味では、エマソンみずからを含めて、預言者の出現の可能性を示唆していることになる。

エマソンは、天地創造によって生じた自然の営みの効用を重視するとともに、同時に神によって創造されたものとして、人間の言語活動を、人間にのみ与えられた第二の天地創造として認識している。自然の中の、顕在また潜在するところの神秘を直観し、それを言語のもつ神秘性と結びつけて、直観によってとらえられた自然の神秘は、同じく直観的創造的文筆によって言語表現できる、とエマソンは唱えた。

### 〈エマソンの悲劇〉

エマソンの思想は、いわゆる超越主義思想 (Transcendentalism) といわれるもので、経験によらず直接に神から人間に叡知や知識が伝えられうるのだから、それを求めようではないか、というものである。エマソンは、はじめは牧師であったから、神という言葉を使っていたが、そのうちに使わなくなり、かわって第一原理 (Primary Cause) という語を使うようになる。

マックス・ミュラーは、旧世界では見られないそのようなアメリカの文人たちの動向、つまり、宗教を客観的に科学 (Science) する、という動きに、希望と同時に、革新性のためにこうむったエマソンの苦境にたいする同情の気持ちもあったのではないかと考えられる。『宗教学序説』が出版された1873年には、エマソンは、すでに70代であり、この9年後には没している。と

いうことは、マックス・ミュラーは、宗教者としてのエマソンが自身の宗教観を公表したための失墜と苦難を見てきたのである。

エマソンはハーバード大学出身であり、その由緒あるユニテリアン派の第二教会で牧師をしていたにもかかわらず、その職を追われることになった。その原因が『自然論』(Nature) (1836)であった。

超越主義思想は、アメリカのネオ・ルネッサンスと期を一にしたが、1830年代から1840年代というわずかな一時期ボストンを中心に風靡したのみである。エマソンの思想は文学思想であるとの評価が定着し、宗教性については考慮されていない。その才能も次第に常識的な、いわゆる自然賛美(Nature-writing)の文学になってしまった、と考えられている。講演(Lyceum)によって生計を立てねばならなかったために、ある程度は世評を気遣って軌道修正をせざるをえなかったであろう。ユニテリアンの教義から当然導き出される帰結を、つまり、客観的で次元の高い立場からの神意識を、エマソンは述べたのであった。それにたいして、マックス・ミュラーはエマソンに敬意を払い、また、その超越主義思想の実践の惨たる結果に同情したのではないだろうか。

超越主義思想のじっさいの実践の場は、エマソンが主宰する超越クラブ(Transcendental Club)であった。しかし、エマソンの思想に投合した人たちが書き残した膨大な量の『ダイアル誌』(The Dial)(=羅針盤)を見るかぎり、超越クラブは、支離滅裂クラブとしかいいようがないのである。気分を高揚させて書き、神に憑依されることをねがったが、なにも起こらなかった。神と一体になり直接神から知識を得る、というエマソンの超越主義思想は、言語・著述に関するかぎり、不可能であった。エマソンをはじめ、追従した人たちには、天与の才の流出はなかったのである。

### 〈継承者の資質〉

たしかに、エマソンの宗教性・超越主義思想から具体的に生まれてきたものが何であったかを示すには、結果が乏しすぎるといわざるをえない。エマソンの思想の継承者は、超越思想を実践し超越者(Transcendentalist)あるいは神秘者(Mystic)になっていなければならない。そして、そのような者として、天与の才の溢れ出たことを示す作品を書いていなければならない。そのような文才の人は、エマソンをふくめて、輩出することはなかった。

一例を示すと、ソロー(Henry Thoreau, 1817-1882)は、超越クラブに所属して、また独自に、自然と一体になるようひたすら努力し、著述も多く残している。エマソンの説を信奉し実践に生涯を捧げたが、結果として、ソローは、超越者にはなれなかった。隠遁者ではあったが、超越主義思想の奇蹟は起こらなかったからである。ソローには、神秘者としての発現はなかったのである。

エマソン（1803-1882）とほぼ同時代のメルヴィル（1819-1891）は、エマソンの主宰する超越クラブに所属しなかったし、クラブの文人とはなんら接触がなかったが、メルヴィルこそエマソンの超越主義思想の真の産物である、と考えたい。超越主義思想の、人知を超越する、という思想が、メルヴィルの作品の内容と文体に明らかに示されているからである。表現されている世界は不条理であっても、神（あるいは第一原理）認識というべきものは、首尾一貫した体系をもつものとして、えがかれている。メルヴィルがただ一人エマソンの思想を継承し、実践の成果を著わした、ということについては、指摘にとどめて、メルヴィルの宗教性については、ここでは触れない。

### 〈スエーデンボルグを意識して〉

エマソンが超越主義思想を『自然』（*Nature*, 1836）によって初めて発表したときには、スエーデンボルグ（Emanuel Swedenborg 1688-1772）の思想と実践がエマソンの念頭にあったであろう。エマソンは、ドイツの詩人たちの、人智を超えた詩才の湧出に触発されたのも事実で、みずからを詩人と呼んでいる。とはいえ、思想を雄弁に語るという意味での詩人であって、エマソンはみずからを、すぐれた詩作の才はない、と認めている。じっさい、スエーデンボルグを意識しないでは、また、スエーデンボルグの、あのような超越の事実を見ないでは、エマソンは超越主義思想を語れなかつたろう。

スエーデンボルグにあっては、神智の流出は、誰の目にも明らかであった。預言者の出現はもはや無い、といわれた新約聖書のキリスト教時代にあっても、スエーデンボルグはそのような神智を預かる人々の一人であった、といわざるをえない。超越主義思想が、ドイツ・ローマン主義運動と呼応して、文学運動から始まったものであるという事実から、超越主義思想のもつ宗教性が、ややもすると見落とされ抜け落ちる可能性は大きい。エマソンは『自然』において、そのような宗教的超越を説いていたにもかかわらずである。

スエーデンボルグは、思想家というよりはむしろ、神秘家そのものであって、スエーデンボルグの著作は、霊界で見てきたことをつづったまでである。

### 〈エマソンの側からの、マックス・ミュラーとの接点1〉

エマソンは、古い書物や歴史を知らなくても、農夫が天気を詳しく読むのと同じように、自然に親しく触れ自然と同化し感応すれば、人は深い神智に達しうる、創造の秘密を知ることができる、と説いたのである。エマソンの宗教者としての異端性は、このあたりにもあった。

じっさい、エマソンは、詩人・哲学者・思索家など、大言壮語の文人とされてしまって、宗教者であることが見過ごされてしまうのである。結局、エマソンは文学史上に名を連ねる作家・詩

人として納まってしまっている。その革新性・斬新さは、『アメリカの学者』(The American Scholar, 1837) など、アメリカ精神の独立を説くものとしての宗教的要素が、見過ごされてしまい、エマソンの影響は一過性のものにされてしまっているのである。

エマソンは1848年4月7日の日記に、

「私はあらゆる講演でただ一つの教えを説いてきた。それは「個人の無限性」である。私が自分の講演を、芸術論、政治論、文学論、あるいは家庭論と称するかぎり、聴衆は容易に受け入れてくれるし、賞賛さえしてくれる。しかし私が題目を宗教論とすると、たちまち彼らは憤慨する。宗教論と題しても、同じ真理を新しい種類の事実に応用したものにすぎないのに。」(英文引用略)

と書いている。エマソンの、宗教者としての大胆かつ革新的な主張と実践は見過ごされているのである。

世襲の神や教会という概念から抜け出しはしたが、エマソンが宗教者でありつづけ、神というものを自然のなかに探求しつづけたことは否定できない。ユニテリアン派の教義では、キリストは模範の人間であるとされ、キリストの神性は否定されていた。三位一体説が排され、神のみ唯一の神格が主張された。キリストは神ではないという説を、エマソンはさらに敷衍して、キリスト教の秘蹟である聖餐式を意味のないものと説いた。三位一体の否定から、また、科学的研究という姿勢から、当然導き出される説ではあったが、聖職者たちには受け入れられなかった。エマソンは、マックス・ミュラーが、宗教というものを科学的に解明しようとした試みと共通する認識をもっていた、というのが、エマソンとマックス・ミュラーの接点の一つといえるのではないか。

#### 〈マックス・ミュラーの側からの、マックス・ミュラーとの接点2〉

マックス・ミュラーは、『宗教学講演』(著書になるまえの『宗教学序説』)において、人間の能力の中には、「無限なるものを捉える能力」(Faculty of the infinite)があるのではないかと、いって、この能力について論じている。無限なるものを捉える能力というのは、神秘思想のシャーマニズムもふくむ宗教の領域であるとすると、ふつうの人間には及ばぬ能力である。エマソンの超越思想は、その能力は自然と合一することによって客観的に得られると説くのであるから、宗教を科学するという意味から、マックス・ミュラーの「無限なるものを捉える能力」を「科学する」という提唱と近いと云わざるをえない。エマソンは、「神秘家のスエーデンボルグ」(Swedenborg; or the Mystic) という講演原稿も書いており、スエーデンボルグ主義者であった。しかし、スエーデンボルグの能力は生来のものであったにもかかわらず、『自然』のなかで、その能力は訓練によって開発できると主張したところは、エマソンの独自性であったし、エマソンが科学的に宗教現象をとらえようとした点ではなかつたらうか。

エマソンの言葉「個人の無限性」(Man's being of the boundless) (『神学部講演』) (*The Address delivered before the Senior Class in Divinity College*) (1838) は、マックス・ミュラーの「無限なるものを捉える能力」に相応するものではないか。

エマソンの、マックス・ミュラーとの接点1と2は、要するに同じもので、両者はともに、宗教を科学的に分析する、という新しい宗教学の可能性と方法を示唆しているといえるだろう。

### 〈『自然』が異端とされる理由〉

エマソンは、自然を観想すると自然の創造者である神の属性を得ることができる、また、人は神の被造物であるから、本来、神の属性をもつ、したがって、人の性は善である、とした。エマソンは、性善説を唱えたのである。ユニテリアン派も原罪を認めていないから、超越主義思想も、当然キリストの仲介を必要としないで、自然との合一によって人は神になれると説く。仏教も成仏を説くから、またエマソンはインドの仏教観にも触れていたから、エマソンがとくに新しいわけではないが、エマソンは、キリスト教の伝統をすべて越えてしまったことになる。

### 〈『自然』〉

エマソンは、つぎのように呼びかける。「われわれの時代は懐古趣味である。父祖の墳墓を建造し、その文献、歴史、批評を書く。古い時代の啓示が尊重されるあまり、今の時代は、新しい啓示を受ける可能性について思い及ばぬ。往時は、人々は、直接、顔と顔を向き合わせて、神と自然を見たものだが、今は、昔の人々の目に映ったものを見ているにすぎない。どうして、現在も、直接、自分自身で神を見ることができないといえるだろうか。伝統によるのではなく、われわれ自身の、洞察(=直感)に満ちた哲学と詩を持つことができない筈があろうか。われわれ自身の、直接啓示を受けた宗教をもつことができない筈があろうか。自然の懐に抱かれ、そこからは生命の洪水が、われわれの中に流れ込むというのに、自然は力を注ぎだして、自然の大きさに比例した活動をするように、われわれを招いているというのに、なぜ、乾いた骨のなかを手探りし、衣装戸棚から色褪せた衣装を引き出し、生きて活気あるこの世代に、仮面舞踏会をさせようとするのか。」

(Our Age is retrospective. It builds the sepulchers of the fathers. It writes biographies, histories, and criticism. The foregoing generations beheld God and nature face to face; We, through their eyes. Why should not we also enjoy an original relation to the universe? We should not we have a poetry and philosophy of insight and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs? Embosomed for a season in nature, whose floods of life stream around and through us, and invite us by

the powers they supply, to action proportioned to nature, why should we grope among the dry bones of the past, or put the living generation into masquerade out of its faded wardrobe?') (371 Introduction of *NATURE*)

『自然』は、このような詩的な呼びかけでもって始まっている。エマソンは、みずからを詩人である、といているし、たしかにこの文章は詩的直観に充たされている。しかし、この文章は、霊性の開発、を呼びかけており、エマソンが、詩人の資質をもつと同時に、宗教者であることも示している。エマソンが宗教者ではないという印象を与えてしまい、宗教史で取り扱われることなく文学史上でエマソンが処理されてしまう原因にもなっている。したがって、エマソンとスエーデンボルグの思想が関連づけられて論じられることもない。また、エマソンは、悟性 (Understanding) や理性 (Reasoning) など、ドイツ観念論の語彙を使って新しい意味をもたせて、自然を霊的に論じるので、エマソンの思想は、きわめて誤解を招くのである。エマソンの思想は、文学としてよりはむしろ、宗教としてとして読むのであれば、理解しがたいのである。

『自然』つぎの章立てになっている。

序 (Introduction)

第I章 自然 (Nature)

第II章 効用 (Commodity)

第III章 美 (Beauty)

第IV章 言語 (Language)

第V章 鍛錬 (Discipline)

第VI章 観念論 (Idealism)

第VII章 精神 (Spirit)

第VIII章 展望 (Prospect)

枠組みは、カントの真善美を取り入れた道徳的なものになっている。「精神」と「展望」という章立てからは、超越によって新しい地平をひらこうとする意思を感じ取れる。新しい超越主義思想によって人間尊重のアメリカ的神秘思想を待ち望んでいるといえるだろう。「効用」からは、アメリカ的功利精神がうかがわれる。「言語」には、言語によらなければ、人間の知的活動はありえないとする思想があって、マックス・ミュラーの比較宗教の思想に近い。

### 〈エマソンの『自然』〉

- 1) エマソンのいう自然は、自然の営みの現象をいうばかりではない。人は外界の自然の営みにそっくりそのまま対応しあった自然そのものである、ということである。自然の営みは、あるいは、人の目に映る外界の現象は、その人の想念がそのまま現象になって外界に現れている、ということになる。人の想念が外界を生み出す、ということになる。



- 2) 人の想念が透明なほどに澄んでくれば、スエーデンボルグが見聞してきて記録したごとき境界の姿が、その人の視界に映るようになる、とエマソンは示唆しており、これが、エマソンの超越思想である。このような境地が修得できれば、人の能力を超えた詩才が、いわば天界から、送り出さるだろう、というのが、エマソンの超越思想である。
- 3) そのような能力を得る方法がある、と説いているのが、エマソンの超越思想である。それは、高潔な人格の涵養に努め、自然と一体になることである、というのである。
- 4) キリスト教という教派を超越して、何か宇宙全体を統括して支配する神のごとき存在、そのような天界への往来を、エマソンの超越思想は目的としている。スエーデンボルグの先例にならば、ユニテリアンの教義を推しすすめると、このような思想が出てくるのは、十分に理解できることである。
- 5) ヒンズー教や仏教の思想を取り入れていたから、エマソンが超越などという東洋の神秘思想に触れていたであろうことは、当然考えられうることである。超越を果たすための能力開発の方法は、インドなど東洋では古くから広く説かれていることである。そのような、いわば神通の開発方法と、多くの達成者がいるということは、東洋では、古来より珍しいことではない。

東洋思想に触れたからといって、エマソンがユニテリアンからはずれたとはいえない。エマソンの語彙は、カントなどの西洋哲学の学術語を使っており、東洋思想の語彙は使われていない。言語を重視する点では、サンスクリット学者のマックス・ミュラーの説く宗教学の方法ときわめて近いものといわざるをえない。

『自然』の最終章である第8章「展望」には、エマソンの結論として、つぎのような記述がある。

- イ) 「かすかに思い及ぶ、と思われるもの——それほど精妙なのだが、これは、永遠の真理のなかで、人の心の奥底に深く根をおいているために、かすかでおぼろであることがよくある。…もっとも博識な博物学者 (Naturarist) は、真理に対して、完全で敬虔な注意を払う人である。…精神の自然の発露により、たえざる自己回復により、また完全な謙虚の心によって達せられるものがある。…推量は、議論の余地のない断言よりも、実り豊かであることが多い。」\* (斉藤103)
- ロ) 「人は零落した神である。人が無垢であるなら、生命はさらに長くなり、われわれが夢からめざめる時のように、静かに不死の世界へ入っていく。」(108)
- ハ) 「現在、人は、自然に対して、自分の力の半分しか用いていない、自分の悟性だけを用いて生きている。」(109)
- ニ) 「人が全力をつくして、悟性とともてに理性をも用いて、自然に働きかける行動の例が、ときたま見られる。そのような例として、すべての国民が古代においてもっていた奇蹟の伝説、イエス・キリストの歴史…などに見られる、主義の貫徹、スエーデンボルグ、ホーエンローヘ

(訳注;19世紀のドイツの牧師、祈りにより病人を癒した)、シェーカー教徒などが行ったと伝えられている、熱烈な信仰による奇蹟、今では動物磁気の名の下に一括されている多くのあいまいで、今なお異論のある事実、祈り、雄弁、自己治癒、子供の知恵などがある。これらは、「理性」が一時的ではあるが、主権を握った例である、時間と空間のなかには存在しない力、即座に流入して原因となる力が発揮された例である。」(110)

ホ)「本来の永遠の美を、世界が取り戻すという問題は、魂の救いによって、解決される。われわれが自然を見ると目に見える破滅もしくは空しさは、われわれ自身の目にあるものなのだ。視力の軸は事物の軸と一致していないために、事物は透明でなく、不透明に見える。」(110)

へ)「祈りは、これも真理の研究ではないだろうか——魂が、未知の無限の中へと突進することではなかろうか。心から祈るものは、かならず何か学ぶところがある。あらゆる対象を、個人的な関係から切り離し、これを思想の光のうちに見ようと決心した忠実な思想家が、同時に、もっとも気高い愛情の日でもって、科学を燃え上がらせるならば、その時には、神が創造物のなかに、もう一度出て行くであろう。」(111)

ト)「一つ一つの現象は、心の機能と感情とに、その根幹をもっていることを、学ばなくては行けない。抽象的な問題と、あなたの理性がとり組んでいるあいだに、自然は、その問題を具体的な形で示し、これがあなたの手によって解決されるようにする。」(112)

チ)「自然は固定していないで、流動している。精神は自然を変え、これに形を与えて作り上げる。自然が流動しないと、凶暴である場合は、精神が欠けているためである。自然は、流動し、変わり易く、従順である。精神は、それぞれ自分の家を建てる。この精神の家のかなたには世界があり、この精神の世界のかなたには、天がある。だから、世界はあなたのために存在するものであることを知らなくては行けない。なぜなら、あなたは、完全な現象だからである。われわれのあるがままの姿だけを、われわれは見ることができる。」(112)

リ)「あなたは、アダムが持っていたすべてのものを持っていたし、アダムがすることができたすべてをすることができる。アダムは自分の家を天地と呼び、…一線一点にいたるまで、あなたの領土は、美しい名前こそっていないが、アダムの領土と同じである。」(112-113)

ヌ)「あなた自身の世界をうち立てなさい。あなたが、その生活を、あなたの心のなかの純一な観念に、合致させると、たちまちにして、広大な世界がひらけてくるであろう。事物における革命は、精神の流入にともない、これに対応しておこるであろう。」(113)

ル)「前進する精神は、行く道を、飾りたて、自分の目にふれる美と、自分を恍惚とさせる歌とを、たずさえて進む、美しい顔、温かいところ、聡明な話、英雄的な行為などを、進み行く道の周囲に描き、ついに悪は、もう見られなくなるであろう。自然を支配する人間の領土、これは観察によって現れ来るものではなく、今は、神について夢見る人間の夢よりも、なお遠くにある領土であるが、この領土に、次第に完全な視力を回復した盲人のような驚きを感じて、入っていくであろう。」(113)

自然については、エマソンには、さらに、つぎのような著述ないし講演がある。

『天文学』(*Astronomy*, 1832)

『博物学者』(*The Naturalist*, 1834)

『自然』(*Nature*, 1836)

『アメリカの学者』(*The American Scholar*, 1837)

『神学部講演』(*An Address delivered before the Senior Class in Divinity College*, 1838)

『自然の方法』(*The Method of Nature*, 1841)

『自然』(*'Nature' in Essays: Second Series*, 1844)

いずれも初期の作品であって、エマソンの自然論が述べられている。あとの二作品の『自然の方法』と第二シリーズの『自然』は、最初の『自然』が発表されてから5年ないし8年が経過しているため、書きかえられ婉曲な表現になっている。そのため、思想の変化・凡庸化などの印象を与えるが、本質的には、エマソンの主張は変わっていない。

### 〈ユニテリアニズムの教義〉

キリスト教の一派としてのユニテリアニズムの発祥はイギリスにあった。エマソンの超越主義思想が説かれる頃には、アメリカのユニテリアン派は、あまりにも合理主義が優先され、宗教性が失われ、そのため宗教としては凡庸に墮していた。ユニテリアン派の牧師の中にも超越主義思想に同調するものもいた。

ユニテリアニズムは、神は人間の内面に存在する、と説く宗教教説であった。ユニテリアニズムは、会衆を擁する教会を保有してはいたが、組織宗派とはいえず、むしろ一つの思考形態の型であった。ユニテリアニズムによると、神は慈悲深い父であって、怒りの神 (*Angry God*) ではない、神は道徳的完成を目指して励む人間に力を与えるのである。キリストは、人間にとって、栄光に輝く友であり、神のようになる方法を人に教えるのである。人は原罪を免れて生まれており、道徳教育によって完成に至る。現世で至福を達成できれば、死後について考える必要はない、とする。このような教説では、ユニテリアニズムは、人間中心の文化主義であって、神中心の超自然主義ではない (Ando, 56)\*。

### 〈ユニテリアニズム、当時の状況〉

ユニテリアンの第一教会は、公式には、会衆派教会からは分離されており、ボストンにあっては、王立礼拝堂 (*King's Chapel*) であった。ここで、一般民衆の新しい形態の祈りが、1785年に始まった。この傾向は、プリーストリ (*Joseph Priestly*, 1733-1804) という、アメリカのユ

ユニテリアンを組織するために来ていた、イギリス人のユニテリアンによって、高められることになった。さらに、会衆派の自由視点支派 (Nonorthodox) の聖職者であった、ウェア (Henry Ware, 1764-1845) が、ハーヴァード神学部の非伝統派 (Conorthodox) の初代教授として、ユニテリア思想を公布するに及んだ。ボストン会衆派教会の牧師であったチャニング (William Ellery Channing, 1780-1842) が、スパークス (Jared Sparks) の叙任式 (1819) において、説教の中でチャニング自身のユニテリア思想を表明したために、以後チャニングは、ユニテリア思想の使徒として崇められることになった。

ユニテリア運動の目的は、文化主義 (Culturism) と呼ばれてしかるべきものであって、事実、直観 (Intuition) や情感 (Feeling) に向かわずして、むしろ理性 (Reasoning) や悟性 (Understanding) を重んじる傾向にあった。要するに、宗教は合理主義ではない。合理主義の驕りが行き詰まって、完全な謙遜が取って代わることになった。合理主義には、宗教の神秘性や深遠さは存在しないからである。このような合理主義のユニテリアン派ではあったが、チャニングは、直観を重視し心情としては超越主義者であったために、超越主義者として数えられている。ユニテリアン派の全体としての傾向は、理性にもとづく文化主義であったが、渴望を癒すには、無限なるもの、心の深いところにある真・善・美の根源と一つになる、と説く超越主義思想に向かうのは自然の成り行きであった。そのような理由で、超越主義者の多くは、もとは、ユニテリアンであった (Ando, 56-57)。

### 〈ニュー・イングランドの超越主義思想〉

ニュー・イングランドの超越主義思想は、公けには、すでに述べたように、1836年にエマソンが、超越主義思想の哲学的構造 (あるいは憲法) (*The Philosophical Constitution of Transcendentalism*) と呼んで、『自然論』を発表したときに始まる。

1820年に、エヴァレット (Edward Everett)、ティクノー (George Ticknor) その他が、ドイツから帰国し、はじめてカントの超越哲学をアメリカに移入した。1830年頃から、一般の人々の、シェリング (Friedrich Wilhelm Schelling, 1775-1854)、ヘーゲル (Georg Wilhelm Hegel, 1770-1831) などのドイツ観念論にたいする関心は、コールリジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) やクザン (Victor Cousin, 1792-1867) (仏) の作品によって、高められ始めた。コールリジは、シェリングの哲学に精通していた純粹の超越主義者であったし、クザンは、ドイツ観念論をフランスに紹介したのであった。ニュー・イングランドは、外国思想が容易に根付く土地柄であった。ここには、もともと確立された思想は何もなかったからでもあり、人々は、外国思想をすぐさま生活に取り入れるに熱心であった。プラトン (Plato)、プロティヌス (Plotinus)、ジャコビ (Jacobi)、フィヒテ (Fichte)、シュライエルマッハ (Schleiermacher)、ヘルダー (Herder)、カーライル (Carlyle)、ワーズワス (Wordsworth)、孔子 (Confucius)、

ヴァガバッド・ギータの作者であるヴィアサー (Vyasa)、古代ヒンズー教の哲学者たち、仏教徒たち、ヘブライやギリシャの神話作者 (Scriptural authors) たち、トマス・アケンピス (Thomas a Kempis)、パスカル (Pascal) やスエーデンボルグ (Swedenborg) が移入された。(Ando, 58-59)

### 〈超越クラブ〉

このようなニュー・イングランドの思想背景があって、エマソンの『自然論』が公表された。その同じ年に、いわゆる超越クラブ (Transcendental Club) が結成され、コンコードのエマソンの家などで、哲学、神学や文学が論じられることになった。

会員たちはこの会を学林 (Symposium) と呼んだが、ヘッジ・クラブ (Hedge Club) と呼ばれたりもした。ヘッジ (Dr. F.H.Hedge, 1805-90)\*のボストン来訪に際して開催されることが多かったからである。(ヘッジ (hedge) には、防壁、両賭け (丸損をしないように)、言い抜けの余地を残しておく、などの語義がある。) ヘッジは、ユニテリアンの聖職者であり、ハーヴァード神学校の教授であったが、エマソンほか超越主義者たちに、外国で仕入れてきたドイツ観念論哲学の知識を授けた。ヘッジは、カボットの『エマソンの思い出』\*の中で、超越クラブが結成された経緯を述べて、超越主義者たちが、ユニテリアニズムが生じる基になったロック (John Lock, 1632-1704) の経験哲学に飽き足らず、当時の若い聖職者の中にもコールリッジやカーライルに魅かれる者があったと語っている。(Ando, 60-63)

エマソンおよびその仲間たちの観念論は超越主義思想と呼ばれていた。直観を対象とする哲学であったからである。だからといって、エマソンをカントやシェリングやフィヒテの系統に属するとはいえない。ライリー教授によると、「エマソンのドイツ形而上学の知識は乏しく、受け売りであった」(Ando 59, Riley; *American Thought* 159)。超越主義者たちはドイツ観念論の術語を使っていたが、それらの本来の語義から離れ、彼らにとって独特の含意をもたせて使っていたために、聴衆は少なからず当惑し、超越主義にたいして偏見を抱かせるに至った。それについて、ペリーは、彼らが新しい語彙を使うことについて、「エマソンは、バーカーたちと同じように講演をしたのだが、そうすると数年間は、彼の著作の語彙は新しい色彩で飾られるのであった。そういった新しい語彙の意味を完全に習得していないかぎり、彼の『自然論』や『大霊』(Over Soul) は理解できない。まるで新しい色彩と図柄にしたトランプで古いゲームをするようなものだ。ゲームをしている人たちにとっては楽しく、魅せられているとすらいえるだろうが、見物人にとっては仰天すべきほどのものだ」(Ando, 65, *Bliss Perry; Emerson Today* 18-19)、と記録している。

以上の安藤 (原文英文) の引用からは、エマソンの超越主義思想とそれに参加した周辺の人々にたいする当時の人々の奇異と揶揄の目が十分にうかがえるのである。しかも参加した当事者で

あるペリーその人が、超越主義者たちを痛烈に批判しているのが理解できる。事実、彼らの発刊誌である「ダイアル」は、夢遊病的記述に充ちており、エマソンが牧師職を辞さざるをえなかったことと、大半の参加者が職をもたず「ダイアル誌」への寄稿のみという生活であったから、当然予期される世評であった。だからといって、エマソンの超越主義思想そのものの価値を過小評価することはできない。

新しい思想を表明する場合、どのような言葉を使うか、は大いに思案するところであろう。古い皮袋に新しい酒を入れるのであるから、当惑を招くのは当然である。古い語彙に新しい語義を盛る、それ以外に、新しい語彙を創造する、などといった方法は、考えられなかったのだろう。日本の新体詩運動のような、新しい意味は新しい語彙に盛る、といった運動は起こらなかった。周辺の参加した人々の言葉が朦朧として、不純物が混入するのは避けられず、エマソンの心労が思いやられる。また、上記のペリーによる記録の、エマソン他の言葉の使い方についての比喻は、たしかに適切であるが、しかし、エマソンの新思想にたいする理解はなく、みずからへの自負心と距離を置いた冷ややかさが見られる。

### 〈なおもマックス・ミュラーと重なるところ〉

マックス・ミュラーの宗教学提唱の書である『宗教学序説』に書かれた方法論とエマソンの思想には、さらに共通するところがある。比較神学と言語の重要性など、マックス・ミュラーの方法を、エマソンは、超越主義思想を説くにあたり、同じ方法を用いているのである。

マックス・ミュラーは、サンスクリット学者であったから、インド学を研究するのは当然であるが、エマソンもインドのヒンズー教や仏教の神話や世界観を積極的に取り入れている。本稿の冒頭で引用したマックス・ミュラーの『宗教学序説』の序文に、「アメリカでは、比較神学の文献が盛んに増えて…」といているのは、エマソン他の執筆活動を指していることになるだろう。また、「比較神学によって、キリスト教に新しい命が吹き込まれるであろう…」と書かれていることから、マックス・ミュラーは、エマソンをあくまでもキリスト者としてとらえており、キリスト教からの逸脱者とは見ていないことになる。エマソンは、インド神話・インド思想を取り入れることによって、さらに幅広く大きなものとしてキリスト教の神を理解しようとしたのではないか。

マックス・ミュラーは、サンスクリット文献を集め編集し集大成した。サンスクリット語といわれるものは、時代や地方によってさまざまであって、標準語と呼ばれるものは存在しない。さまざまなサンスクリット語を集め、いわば合成してサンスクリット標準語 (Hybrid Sanscrit) を、マックス・ミュラーは作成したのである。もとの原典のサンスクリット語はもはや失われて、今では、その合成サンスクリット語が原典として引用されているのである。マックス・ミュラーは、そのような経緯からか、『言語学』(The Science of Language) を書いている。マック

ス・ミューラーの言語学は、linguistic でもあり、Philology（言語を愛する）でもあり、さらに、マックス・ミューラー独自の提唱するScience of Languageであることになる。文学（＝神話）を客観的・科学的に分析する、といったものとなり、宗教を科学する（Science of Religion）と同じ考えにもとづくものではないか。異なる分野の概念のいわば混血は、拡大された新しい分野を拓くことが期待されたのであろう。地球上のさまざまな宗教を比較して、一つの観点（たとえば、神は一つ、など）から眺めると、新しい視野が広がって、グローバルな見方ができるだろう、という試みであるだろう。

エマソンの宗教観も、そのような拡大されたキリスト教、一つの神を求めるユニテリアンの延長線上にあると考えたい。エマソンは、自然の現象は神の語る言語であるとした。さまざまな万象に神のメッセージを読み取ろうとした。エマソンは、一神教の信奉者・超越主義者（Transcendentalist）であった。そのような宗教を、エマソンは、言語を二方向に用いて、つまり、一方では客観的・学術的に、かつ他方では、詩的直観的に、表現しようとした。学術（Science）と詩的直観（Language and Intuition）という相容れないほどの対照的な手法によって、いわば、マックス・ミューラーの説を実践しようとしたのではないか。

### 〈エマソン年表〉

1803年	5月25日、ボストンにおいてウィリアム・エマソン牧師の第4子として誕生。
1811年	父の死。
1813-17年	ボストン・ラテン学校に学ぶ。
1817-21年	ハーバード大学に学ぶ。
1820年	日記を書き始める。
1821-25年	兄の経営する女子私塾の教師。
1825-28年	ハーバード大学神学部で学ぶ。
1829年	ボストンの第二教会の牧師になる。エレン・タッカーと結婚。
1831年	妻エレンの死。
1832年	第二教会を辞し、12月ヨーロッパにむけて出帆。翌年12月帰国。
1834年	説教と講演によって生活をする。9月コンコードに移る。
1835年	リディア・ジャクソンと結婚。
1836年	『自然』出版。
1837年	『アメリカの学者』（ <i>The American Scholar</i> ）出版。
1838年	『神学部講演』（ <i>An Address delivered before the Senior Class in Divinity College</i> ）
1839年	1月に最後の講演をして、以後は教会での説教をしていない。

- 1840年 『ダイアル誌』(*The Dial*) 発刊。  
1841年 『エッセイズ・第1集』(*Essays - First Series*) 出版。  
ブルック・ファーム創立。(1847年までつづく)  
1844年 『エッセイズ・第2集』(*Essays - Second Series*) 出版。  
1846年 『詩集』(*Poems*) 出版。  
1847-48年 第2回ヨーロッパ旅行。  
1850年 『代表的人間像』(*The Representative man*) 出版。初めて西部へ旅行。  
1851年 『逃亡奴隷法』(*The Law of Fugitive Slaves*) 講演。  
1853年 西部へ講演旅行。  
1856年 『イギリスの国民性』(*English Traits*) 出版。  
1860年 『いかに生くべきか』(*The Conduct of Life*) 出版。  
1867年 詩集『五月祭その他』(*May-Day and Others*) 出版。  
1870年 『社会と孤独』(*Society and Solitude*) 出版。  
1872-73年 第3回ヨーロッパ旅行。  
1875年 『文学と社会的目的』(*Letters and Social Aims*) 出版。  
1872年 4月27日、コンコードで死去。

### 〈マックス・ミュラー略年表〉

マックス・ミュラー (Friedrich Max Mueller, 1823-1900)

ドイツ生まれ、イギリスに帰化、宗教史学者、比較宗教学者、オックスフォード大学で教えた。ギリシャ崇拜の詩人ウィルヘルム・ミュラー (Friedrich Wilhelm Mueller) は、マックス・ミュラーの父である。

マックス・ミュラーは、古典インドの宗教資料、宗教史と神話の比較研究、世界の宗教史の出版に専念した。

マックス・ミュラーのインド学の研究には、つぎのようなものがある。『宗教の起源と発達にすいての講義』(*Lectures on the Origin and Growth of Religion, as Illustrated by the Religions of India*, 1878)、『インドはわれわれに何を教えることができるか』(*India, What Can It Teach Us?* 1883)、『ラーマクリシュナ、その生涯と言葉』(*Ramakrishna, His life and Sayings*, 1898) および『インド哲学の6体系』(*The Systems of Indian Philosophy*, 1899)

マックス・ミュラーはとくに、アジアの大宗教の文献の翻訳の編集の刊行に熱心であった。『アジアの聖典』(*Sacred Books of the East*, 1879-1894) は、50巻に及ぶ。『仏教徒の聖典』



のシリーズは、マックス・ミュラーの監修のもとに、1895年に刊行が始まった。

マックス・ミュラーの、宗教と神話の比較研究の主要著作には、以下のものも含まれる。「比較神話学」("Comparative Mythology" 1856 *Oxford Essays*)、『ドイツの工場からの木っ端片』(*Chips from a German Workshop*) 4巻 (1867-1875)、『宗教学序説』(*Introduction to the Science of Religion*, 1873)、『宗教の起源と成長』(*The Origin and Growth of Religion*, 1891)、『自然宗教』(*Physical Religion*, 1891)、『人類学から見た宗教』(*Anthropological Religion*, 1892)、『神智学、あるいは心理学から見た宗教』(*Theosophy or apychological Religion*, 1893)、『神話学に寄す』(*Contributions to the Science of Mythology*, 2 vols. 1897)がある。また、『自伝風エッセイ』(*Biographical Essays*, 1884)も言及すべき著作である。W. G.マックス・ミュラーの編集による没後出版の『自伝』(*My Autobiography*, 1901)も同様である。

#### 資料

\*Ralph Waldo Emerson *The Works of Ralph Waldo Emerson (New and Complete Copyright Edition of the Works of, Riverside Edition)* 1905 (Prepared for publication, in accordance with the terms of Mr. Emerson's Will, by his literary Executor, Mr. J. Elliot Cabot.)

\**NATURE: The Works of Ralph Waldo Emerson. vol.II* G. Bell and Sons, London)

\*Ralph Waldo Emerson *Selected Prose and Poetry*, edited with an Introduction by Reginald L. Cook, typography by Stefan Salter, 1950 (Holt, Rinehart and Winston)

\*Shoei ANDO (安藤正瑛) 1970 *Zen and American Transcendentalism; - An Investigation of One's Self* - (Hokusesido) (北星堂)

\*F. Max Mueller, K.M. (Right Hon. Professor, Late Foreign Member of the Rensch Institute), *The Science of Religion* 1901 (Longmans, Green and Co., Reprinted from the edition of 1901, London, by AMS edition published in 1978, New York)

\*F. Max Mueller, *Essays on the Science of Religion* 1978 (ditto)

\*F. Max Mueller; *Max Mueller's Encyclopaedia of Language* 1864 (First Published) 1987 (This Cosmo Print) (Published by Rani Kapoor (Mrs.) Cosmo Publications, New Delhi)

\*『エマソン』 齊藤光著 1957 『新英米文学評伝叢書』(研究社)

\*『自然について』 齊藤光訳 1996 『エマソン名著選』(日本教文社)